

| | |
|--------------|---|
| Title | 環境 |
| Author(s) | 曾谷, 国広 |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 16 |
| Issue Date | 2007-03 |
| Text Version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/11094/7878 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

環境

曾谷 国広

環境班は当初ボランティア班として街の環境汚染問題に取り組んできた。ゴミ拾いもその一貫として考えられてきたが実践はされなかった。実際に行われたのは、茨木の車折にて山の間伐のボランティアをしたものであるが、山の自然に触れ、その山の自然を守るについても、人間の手を経なければ守れない現状をみてきた。

環境問題についてアルピニストの野口健は「環境問題を目の前にして、大人は考えるが、子供は動く」と言っている。彼は富士山の樹海のごみ掃除とか登山道のごみ掃除をボランティアを組んでやっていて、大人と子供がどの様に見どの様に感じるのかについてある対談で語っていた。目の前にあるごみを見て、なぜこんなところに捨てるのか、どこから、誰が、こんなことを考えるのが大人であり、何も考えずに、手にとってゴミ袋に入れるのが子供であるそうである。その子供（小学五年位女子）はこんなことをいっている「ごみを捨てる人も悪いが、捨てられているゴミを見ながら何もしないで通り過ぎてゆく人はもっと悪い」。そのままを言う。考え行動をするのはあなたがたであろうから。

女優「東ちづる」は、テレビで白血病と戦っている子供の映像を見、感激してすぐに何かして

あげたくて電話帳から探してその子供の自宅に電話したそうである。電話にでてきたのは父親で、テレビで見た人達からたくさん励ましの電話がかかってきていて忙しそう、東ちづるの名前をいっても普通の人と同じように応対されて終わってしまったそうである。しかし、なんとかそういう人達の役に立ちたくて、骨髓バンクがあるのを知り連絡をして資料を取り寄せ、まず骨髓バンクに登録をしてそしていろんなボランティア活動に手を染めていったそうである。彼女が言うには「まず行動することで、その時あれかこれか考えていたら、いま自分がしているボランティア活動は無かったであろう」と言っていた。実際の社会的問題（医療、環境等）についてどのように扱うかは個人を基底にして考慮される場合、トップダウン的にその理念、概念について考えてから行動に移そうとしても難しいのではないだろうか。それよりもボトムアップ的にまず行動してその中から発生してくる諸処の問題について考えてゆく方がこれからの社会のあり方として受け入れられやすいように思う。

ここ2年環境班の人々は環境問題を考えるについて「エコツーリズムの実践」を検討されてきました。そして昨年（2006/07/09・11/26）の2回実行されました。第一回目（2006/07/09）は万博自然公園にて、環境班の方だけで行われました。自然に親しむということと実際にエコツーリストするに当たっての試行が目的であったのですが、これは作られた自然であり、「本

物の自然ではない」という意見がでてきました。自然の定義とは、人間の手を経ているということが根本になければならないのだろうか？確かに池の底はコンクリートであったし、道は舗装されていたところもあった。木の上に渡り廊下のようなものが作られ木を下にあるいはその木の上や野鳥を観察できる空間もあった。木々の植生も不自然ではあったが、人工の川の辺で両親が昼寝をし、子供が傍で水遊びをしている風景を見ながら、これこそ都会が求める、家族が求める自然なのではないかと考えた。社会的な自然というならば、今の在り様が自然であり、車を使用しCO2を撒き散らしているこの事実、そのために地球温暖化を促進していることも自然なのではないか。手付かずの自然は限定された中でしか見られない、都会においてはそのようなものである。「自然の怖さ」ということも話題になっていたように思います（間違っていたらお許し願いたい）。自然は怖いものだろうか。野性的という言葉があるが、今われわれが生活している場を主体にして自然をみた場合、それは怖いものと映るかもしれない。しかし、歴史的に見て、例えば奈良時代またはそれ以前の時代において、一つの村落を出て次の村落にたどり着くまでの道のりは、今われわれが自然として志向しているものであった。その道中は昼間でも危険であったろうし、夜にその道中、つまり村落を離れてしまうことは死を意味していた。現代に生まれ、育ったわれわれには想像もつかないことである。自然の怖さというが、そ

の怖さを克服するために人間は科学を用い適応してきたのである。しかし、今、自分たちで克服してきた自然を囲われた場所で経験している。人間も動物の一種である限り野性的なものを人間としての根源に持っているのである。未来世代において、地球自然公園リゾートにロケットによって他の惑星からエコツアーリストとして、われわれの子孫がこの地球にやってくることは予測するに難くない。われわれの実践する環境保護によって少しでも長く人間がこの地球に生存できる状態を作ればよいが、その間に地球より住みやすい惑星を見つけるか、そのように作ってしまえるように惑星を改造できるようになることにならなければ、人類という種の存続はないであろう。極端になってしまったが、エコツアーもその一環として人間にとって



なくてはならない根源にあるものを自覚させる一助になると思う。

第2回目は2006/07/11に同じく万博自然公園にて行われました。今回は一般の参加者も含めて後半に哲学カフェを行い自然観察についてそれぞれの考えを深められたものと思います。少し雨が降ってきて、その中での自然観察は天気の良い時とは違った自然観察ができました。木々の手触り、自然に聞こえる音、林の中に入っていくと、なんでもない隅っこにしゃがもうとすると蜘蛛の糸が張られていて、顔にひっかかったりする、はっとして、こんなところにも生の営みがあるということを見つけたとき、人間も他の動植物もこの一瞬の生を共有しているという感覚に捉われ感動しました。一体化ということについて考えさせられたものです。場所は前回と同じではありますが、コースが違ったので感覚的にも異なったものがあったように思います。また、雨の中でのカフェとなり、それなりに集中できたのではないのでしょうか。同じ体験をしたもの同志が対話をするということは、この自然観察を行う上で自然についてそれぞれの認識、考えを深める、そして自然観察会自体の考察を深めるためにも重要な行事であることに気づきました。

2度の自然観察会に参加して

川上 展代

世間で行われている自然観察会や哲学カフェのそれぞれについてすらほとんど予備知識も経験も持っていないのに、自然観察会と哲学カフェを合わせることで環境について考えるというアプローチを模索する班に入ってしまった。最初は不安に思いながらも、逆に先入観を持っていないことを強みにしてとにかくやってみようと切り替えて、この一年を過ごした。そして、同じ場所で行われた二度の自然観察会に参加することで、私は参加者側と主催者側の双方を経験することができた。

初回の自然観察会は、プログラムを考える事前の分科会に何度も出席しながらも、完全に“お客さん”の気分で参加した。自然園のようなところに入るのは久しぶりだし、ゆっくりと緑の中を歩き回ることも自体もかなり久々に、それだけで「自然」を満喫した気分になった。樹木の名前、土の中や水の中の生き物といった新しい知識も身につけられたが、音を絵にして、それを他の参加者と一緒に発表しようというプログラムが最も印象的だった。立ち止まって耳を澄ますこと、それを線や点で表現して他の人と話すことで、自分の「気づく感覚」について考えることがで